

〔一般論文〕

「敬老」関連の概念整理及び「養老」から 「老人福祉」への転換の伏線

中 薫 洋

I はじめに

本稿の目的は、古来より多くの日本人に自明視されてきた「敬老」に関する概念を整理し直し、孝（孝道）、敬老、養老、孝経、養生、優老などが混在するなか、1960年代に入り、老人福祉法制化の検討に伴い、「養老から老人福祉へ」という大きな理念転換が図られようとしていた背景に着目し、そこから解読できる関係者の意図や政策的ねらいの一端にアプローチすることである。

その背後には、「孝道は今や危機に瀕している」（有田 1925：49）、「崩れかけていた敬老思想の堅持が必要」（森 1989：35）、「『敬老』が『軽老』に変貌しつつある」（同：38、傍点筆者）などの論及の如く、孝（孝道）や敬老における危機意識の存在と、その一方で、「長を敬い老人に礼を尽すことを教えて来た事実が良かれ悪かれ、我が国養老事業の発展を遅らせてきた」ことや（中央社会福祉協議会 19--：5）、「親孝行が政治体制と強固に結びついたこと」を問題視した論稿があり（森 1992：38）、すなわち、政策・制度面への影響が指摘され、日本の伝統的な「敬老」精神の醸成が老人を取り巻く法制化の進展に対し、何らかの足枷になっていたとする考究が注目される。

しかしながら、この点について、既存の先行研究では、敬老を尊祖という視点から捉えた賀川（1928:-1931:139）、齊田（1945:363-7）をはじめ、敬神崇祖の念が皇室に対する崇敬親愛の情に結びつくとした橘（1941:114）、さらには、優老俗から養老に迫った橘（1971:249）などがあり、近年では、『家』制度の再編・強化は日本資本主義発展のために必要であり、そのイデオロギーとして『孝』の原理が使われた」などと（利谷・大藤・清水編 1990:212-3）、日本社会の発展に対する「孝」の原理の活用という構図が論及される。だが、そもそも「敬老」に関する類似概念の整理が十分になされておらず、またその史的展開のなかで、いかに「孝」と政策・政治が結びつけられようとしていたのかが検証されているとは言い難いところに研究の余地がある。「養老賑恤の御沙汰書」（1915年）以降、救護法成立（1929年）、新生活保護法成立（1950年）、社会福祉事業法成立（1951年）、国民健康保険法成立（1958年）、国民年金法成立（1959年）、老人福祉法成立（1963年）などの老人を取り巻く法制化の展開のなかで、制度・政策がなぜ「孝」の原理に立脚しなければならず、このことのどこに問題があったのか。なぜ孝（孝道）、敬老、養老、養生、優老俗などの混在状態というように理論的・体系的に整理されないなかで、これらをそもそも老人福祉行政施策にいかに生かそうと企図されていたのか。あるいはまた、なぜ1960年代の老人福祉法制化において孝（孝道）や「敬老」精神に立脚しながら、「養老から老人福祉へ」と理念転換が図られようとし、その過程においていったい何が潜在化していたというのか。さらに、こうした転換期に関係者たちはいかなる思索の下に老人福祉施策の進展に着手しようとし、なぜ、多くの研究者たちはこの点を看過してきたのかなどについても、実証的に明かされていない。つまり、老人福祉法制化の進展の礎となる理念の体系的整理なしにして、戦後日本の老人福祉法制化や関連諸施策の歴史は語れないとするのが本稿の視点である。

このような問題意識及び研究視点の下、本稿では、「養老から老人福祉

「敬老」関連の概念整理及び「養老」から「老人福祉」への転換の伏線（中畠）（147）120
へ」の理念転換の背景を探究の一環として、まず、「敬老」関連の概念整理をした上で、孝（孝道）・敬老・養老と政治・政策との関係性について実証的に考察することを目的とする。具体的な研究課題は、①日本における「孝（孝道）」、「敬老」、「養老」、「養生（訓）」、「優老」について概念整理をし、こうした類似概念が日本人にいかに関容されていたのかを明らかにすること、②「敬老」意識の弱体化や敬遠主義に対し、人々がどのような危機意識を抱き、いかなる現状打開策を採ろうとしていたのかを具体的に明らかにすること、③敬老儀礼と養老事蹟について、「明るい養老事業」の志向が何を潜在化させていたのかを論考すること、④「養老から老人福祉へ」の理念転換の伏線を養老院の実践例を取り上げながら、実証的に考究すること、⑤これまで問題視されてきた孝（孝道）、敬老、養老と政治・政策との結びつきの実相を探究し、何が問題の根源であったのかを究明することの5点である。これら5点を解明することによって、単に先行研究の空白部分を埋めるだけでなく、人々が自明視しやすい「養老から老人福祉へ」の理念転換の背後に迫る際の何らかの手がかりを得ることになると考える。

研究方法としては、沢柳政太郎（1910a・b）『孝道 上巻・下巻』富山房を皮切りに、孝（孝道）、敬老、養老、孝経、皇孝道、老人福祉などに関する文献・史資料を幅広く分析することとし、その補強作業として、行政管理庁行政監察局編（1984）、内務省社会局（1990）、小笠原監修（1992）、社会福祉調査研究会編（1994）、中部社会事業短期大学編（2003）などの資料集を援用する。倫理的配慮としては、「社会政策学会倫理綱領」、「社会事業史学会研究倫理指針」に基づき、人権尊重及び個人情報保護に配慮した。

II 「敬老」の概念整理と史的展開

1 「孝（孝道）」・「敬老」・「養老」・「養生（訓）」・「優老」について

上述の通り、「敬老」に関する諸々の概念については、旧来、「孝（孝道）」は『日本の孝道』（1938年、春秋社）、「敬老」は「敬老に就て」（『社会事業研究』30（5），1942年、26-27頁）などと、各々別個に捉えられ、局所的に論じられることが多かった（沢柳 1910a・b；賀川 1928；岡 1937；石井 1938；竹内 1942；斉田 1945；古川 1954 など）。例えば、敬老を尊祖と捉えた賀川（1928-1931：139）は、「敬老と尊祖とは、我が国体の基礎とも見るべき家族主義と離るべからざる関係がある。子孫より見れば、其祖父母は、死と共に祖先の一人となるのであるゆえ、敬老は即ち尊祖に外ならぬのである」などと述べ¹⁾、一方、大久保（1936：531）は、「即ち我國上古及び中古の養老事業史は、既に記述せる、歴代天皇又は皇室の御賑恤と僧侶及び篤志家の事績による。社会事業史に包含されて居ることをも、併せ考へられるであらう。而して特に要救護の老齡者に対する救恤の記録も、相當散見する様であるが、何と云っても、支那文化、殊に唐文化伝来の影響が、佛教の影響と同様に、我國の養老史に、重大関係あるは、見逃せない事實と云つてよい」などと皇室や外国、さらには仏教をはじめとする宗教の影響が指摘される²⁾。

他方、斉田（1945：363）は、敬老を「老人に対する精神的奉養と、身体的奉養の仕方を知らしめ、以て我が國民の美德として孝道の誠を至さしめんとす」とした上で³⁾、「（一）敬老と孝養とは吾が國古来の美風にして、家庭和樂の有力なる一要素である事を實例により自覺せしむ。（二）善良なる家風は、實に善良なる國家社会の風俗を作る原因をなすものであれば、敬老と孝養とは其の善良なる家風の一要素である事をも會得させる」などと（斉田 1945：367）⁴⁾、敬老と孝養を並列的に把握し、これらがわが

国独自の美德として孝道につながり、個々の美風が国家社会の善良な風俗を作るという文脈で捉えられる。つまり、旧来、敬老は家庭や国家社会の形成との関わりから論じられることが多く、その延長線上に孝道があると認識されてきたことが分かる。

だが、その反面、竹内（1937：303）は、「敬遠主義」という文言を用い、警鐘を鳴らそうとした点は見逃せない。具体的には、「結局服従せねばならぬものなれば、拮抗して自他共に不快な空気を吸ふのはつまらないではないか、故に子たるもの、嫁たるもの、使用人たるものの一つの務めと思ひ『親と主人は無理をいふもの』と思ひ諦めよと言ふのだ。いかにも封建的な重苦しい空気ではある。かかる状態の下に敬老主義は歪められた道学的な権力主義によって敬遠主義に変質しつつあったのだ。勿論敬遠主義といっても擬態的に——形式上——敬老主義に準すべきものでありとすれば、一概に排斥する理由はないが、徳川時代の怯えた敬遠主義的な敬老主義の歴史が、昭和の今日に於ても完全に清算出来ないといふことは、新興日本の恥辱以外の何ものでもない」などと断罪し、敬遠主義の継続性のなかに内包される問題点を汲み取ろうとする。こうした視点は既存の研究にあまりなく、お上に対する敬遠主義が年長者に対する敬老主義へと安易に応用されたところに問題の根源を探る糸口が見出せる可能性が指摘される。いずれにしても、なぜそうした敬遠主義や敬老主義が大きな反発もなく多くの人々に受容され続けてきたのか。なぜ敬老の類似概念が別個に論じられることが多いのかなどの理由までは十分に論考されず、また、「敬老」がいかにして家庭、家族、国家、社会と関連づけられてきたのが究明されようとしなかったのか、などについても未解明なままとなっている。故に、こうした問題意識の下、以下論述を進める。

表1 日本における「孝（孝道）」・「敬老」・「養老」・「養生（訓）」・「優老」についての概念整理

用語	主な意味	出典
孝 (孝道)	<ul style="list-style-type: none"> ・孝は人間の最初の徳行である ・孝は継続的道德であり、遡源的道德である ・孝道即仏道 ・孝は愛を以て本と為す、愛なれば順なり、順なれば百行成る ・忠孝一本 ・孝道に就て親切に教へしもの「孝経」の右に出づるものなし ・孝道は両親若しくは両親の位置に占むるものに和合すること ・中国の孝道に基づいた風習を尚齒会といい、優雅な文人・詩人間で発達した ・孝とは父と母とに事へる道であり、わけても父に事へることが孝道の基本 ・孝の内容 (1. 従順、2. 親愛、3. 尊敬、4. 奉養 (養体・養志)、5. 成徳、6. 葬祭、7. 崇祖) ・孝行という言葉を英和辞典で引くと、普通、filial duty (子供の義務) と出ている ・孝子——親孝行の昔話 (物語) 	<p>沢柳 (1910 : 26-27)</p> <p>沢柳 (1910 : 31-36)</p> <p>沢柳 (1910 : 137-138)</p> <p>伊藤仁斉 (= 沢柳 1910 : 218-219)</p> <p>藤田東湖 (= 沢柳 1910 : 349-350)</p> <p>忠孝振興会 (1934 : 緒言)</p> <p>廣池 (1929 : 130-131)</p> <p>森 (1984 : 320)</p> <p>岡 (1937 : 18)</p> <p>古川 (1954 : 7)</p> <p>森 (1992 : 37)</p> <p>養老町 HP</p>
敬老	<ul style="list-style-type: none"> ・敬老は即ち尊祖に外ならぬ ・敬老と孝養とは吾が國古来の美風 ・敬老尚齒の精神は到底敬神崇祖の至情と切離せない ・口先のみの敬老観や机上における家族制度の美風でなく、実践的な精神の慰安を贈る事 ・支那伝来の徳教・礼教は一般の敬老尚齒である ・わが国古来の養老敬老の醇風美俗が本質の特徴である ・(江戸時代以降) 儒教の影響が強く、孝が道義の根本であり、敬老がこれに次ぐ徳義として考えられ、孝を尊び、長を敬うの道は王道の基である 	<p>賀川 (1928-1931 : 139)</p> <p>斉田 (1945 : 367)</p> <p>橘 (1943 : 103)</p> <p>竹内 (1942 : 26)</p> <p>中央社会福祉協議会 (19-- : 5)</p> <p>橘 (1942 : 25)</p> <p>森 (1984 : 25)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・としよりの日（老人の日・敬老の日）の記録 ・敬老の日という発想は最も不当であり、老人福祉問題を根本的に誤解している 	<p>森（1984：18）</p> <p>中川善之助（＝森 1984：22）</p>
養老	<ul style="list-style-type: none"> ・支那の文化、殊に唐文化伝来の影響が仏教の影響と同様に我國の養老に重大関係あるは見逃せない ・佛教に於ける慈悲濟度の教理と儒教に於ける修身徳治の教條とによって育てられ養老として次第に大衆的に倫理化し実践化したものであって、忠孝博愛の道徳思想として国民全般の国で遵守するところなり ・仏教の救済思想および儒教の徳治思想が輸入され、それらが我國本来の神話的畏敬の念と結びついて発展した ・単に老人に衣食を給するだけでなく、礼を以て老者に仕えること ・あく迄も慈善的な上から下に対して恵んでやるという気持ち ・養老賑恤の御沙汰書と愛知縣敬老會 	<p>大久保（1936：531）</p> <p>橘（1941：115）</p> <p>橘（1971：249）</p> <p>中央社会福祉協議会（19--：1）</p> <p>中央社会福祉協議会（19--：1）</p> <p>大谷派慈善協会本部（1915：34-5）</p>
養生（訓）	<p>『養生訓』は1713年に貝原益軒が執筆した全8巻（総論〔上〕、総論〔下〕、飲食〔上〕、飲食〔下〕、五官、慎病、用藥、養老）から成るものである。養老の箇所には、「真心をもって親を養う、子供のように老人を養う、雑事をさける、心を楽しく、晩節を保つ、老人と保養……」が記される</p>	<p>森（1984：415）</p>
優老	<p>『隠居論』は1891年に、穂積陳重が執筆した書籍（隠居の6項目）であり、1915年には第2版が出版され、8項目がまとめられた。なかでも「隠居の将来」においては、優老の習俗、優老の徳教、優老の礼制、優老の法制、隠居の存</p>	<p>森（1984：416）</p>

【注1】 沢柳（1910a・b：27-36）によれば、孝こそが人間最初の徳行であり、それは継続的の徳・遡源的の徳などと、過去・現在・未来に関わるものであるという。

【注2】 森（1984：25）は、孝は道義の根本であり、敬老は次孝であるとしている。

【注3】 橘（1971：249）は、日本では仏教と儒教の輸入が日本独自の神話的畏敬と結びついて発展したものが養老と述べている。なお、神話的畏敬については、養老町編（1978：139）や森（1984：19）などに詳しい。

【出典】 筆者作成。

2 「敬老」に基づく慈悲済度と修身徳治

上記の問題意識にアプローチしようとした数少ない研究の一つが橘（1941；1942；1943）である。彼は、「皇室に対する崇敬親愛の情が敬神崇祖の念と結びつくことによって、一面宏遠なる肇國の精神に通じて尊嚴なる國體の本義に適ふこととなり、他面優美な国民性の精髓を形づくって純煉たる文化を産み出すこととなるのである。この國體に対する感銘、この國民性の発展こそ我々の臣節を全うする所以でなければならぬ。ここにいふ敬老尚齒の精神も當然この敬神崇祖の至情から生れてたものであり、従って一面敬神崇祖の國家的情操を持つものは必ずや他面敬老尚齒の家族的感情を抱かずにはおれない」などと（橘 1941：114）、橘は皇室への崇敬親愛と家庭的な敬老尚齒との関連に触れつつ、「慈悲済度と修身徳治」という用語を用い、以下のように概説する。

敬老尚齒の思想は敬神崇祖の理念に芽ばへ、培はれたことは以上に述べた通りであるが（之に関する民族学的考証は省略する）、更に佛敎に於ける慈悲済度の教理と儒敎に於ける修身徳治の教條とによって育てられ、養老として次第に大衆的に倫理化し實踐化したのであって、忠孝博愛の道德思想として國民全般の固く遵守するところとなり、醇厚且つ牢固たる國民的信念となつて、如何なる田夫野人と雖も敢てこれを怠ることを潔しとしない。もし老親に対する孝養を怠り、敬愛の念を無視する

「敬老」関連の概念整理及び「養老」から「老人福祉」への転換の伏線（中畠）（153）114

ものがあれば、忽ちにして世間の指弾を受け、強硬な社会の制裁を蒙るのである。（橘 1941：115、丸括弧内ママ・傍線筆者）

つまり、日本では、皇室への情と家族思想が結びつきつつも、仏教の慈悲濟度と儒教の修身徳治により「敬老」思想が発展し、その大衆的な倫理化・実践化として、忠孝博愛という形で「養老」が普及していったことになる。さらに、橘（1941：33）は、敬老の習俗として、「棄老の習俗が退隱の風習となり、更にそれが現代の隱居の法則へと転化したこと、並びに古代中世の社会に於ける崇老の思想が転じて敬老の思想や実践を生じたことは論理的にも當を得たもの」などと論じ、神儒佛三位圓融の觀想のなかに「わが國古来の養老敬老の醇風美俗の本質的な特徴がある」と論考する（橘 1942：25）。

だが、一方、敬老をあまりにも抽象的に捉えることを危惧した竹内芳衛は、「……老人は過去の文化の恩人である。口先のみの敬老觀や机上で家族制度の美風を叫ぶよりももっと実践的な精神の慰安を贈る事は社会の責務である。此事は決して消極的なことではなく社会教育上最も輕視すべからざる積極性を持つものであらう」などと（竹内 1942：26）、精神面のみならず、実践面こそが重要であるとし、その根拠として、功利觀へと流されることなく、高い道德觀によって社会的にもたらされるものが敬老という構図を考想し、以下のように述べている点が注目される。

敬老といふことは、欧米的近代思想からは殆んど問題にされてゐない思想である。従って東洋的な陳腐な思想として、現代人から片付けられるのは當然である。家長中心の家庭といふものは即ち敬老思想がなければうまく行くものでない。敬老觀念に依って家長中心の家族制度は和かに保たれ得るのである。本来から言へば敬老思想は、文化の恩人であるからといふ功利的考へから選ばれるべきでなく、全くの功利觀を超越し

た道德観念に依って行はれるものでなければならぬのである。即ち老人は特別に國家に功勞ある人、學識ある人は別として一般に老いて第一線人たるを得ない人々である。従って第一線人からは手纏ひ足纏ひである。さういふ弱者を養ふだけでも大した道德であるのに、それを敬するといふのであるから、絶対功利觀を超越した最高な道德であるといふことが出来る。即ち高い道德観念なくして敬老観念は生じないといふ意味はそれをいふのである。故に逆に言へば、我々が敬老的であるといふことは、最高な道德を持つといふことを持つてゐるが故に敬老的たり得るとも言へるのである。（竹内 1942：27、傍点筆者）

上記から、功利觀を超えた高い道德觀に基づく弱者、すなわち第一線人たるを得ない人々を養うのが敬老とされ、このことは戦前から戦後以降も、多くの人々に受容されてきたと考えられるが、他方で、こうした考え方が揺らぎ、稀薄化し始めることに対し、危惧する論調も見られることになる。

3 崩れかけた「敬老」と敬遠主義

表 2 孝（孝道）・敬老・養老の危機を説明する主な言説

主な言説	出典
孝道は今や危機に瀕している	有田（1925：49）
近来社会の急激なる変化と共に、敬老の風は次第に廃れてゆく傾がある	賀川（1928-1931：139）
孝の道易からず	石井（1938：717）
敬老精神の喪失——かかる間に、日本の若い人々の心から、漸次、敬老、養老の心は失われつつあった	川瀬（1958：79）
本邦家族制度の最も美德とされていた敬老思想が次第に軽視されるような傾向にあることは、まことに遺憾な次第	森（1984：18）

崩れかけていた敬老思想の堅持が必要になってきた	森（1989：35）
「敬老」が「軽老」に変貌しつつある	森（1989：38）

【出典】筆者作成による。

表2に示したように、敬老精神の弱体化や揺らぎを論じる論考は、1925（大正14年）頃から見られ始め、例えば、有田（1925：49）の「孝道は今や危機に瀕している」を皮切りに、「近來社会の急激なる変化と共に、敬老の風は次第に廃れてゆく傾がある」（賀川1928-1931：139）や、「敬老精神の喪失」（川瀬1958：79）などと論じられた（表2参照）。このような論調は戦前・戦中・戦後を通じて見られ、なかでも、戦後、川瀬（1958：79）は、それは特に「日本の若い人々の心」から生じた現象であると論及し、この若い人々というのはこれからの日本社会の形成の担い手であり、このような忌忌しき事態に対応する必要があるため、1950年代後半頃から検討され始めたのが老人福祉施策であった。この辺りの事情については、以下の森幹郎の言及に詳しく、注目してみよう。

法規範としての老い観——一九六〇年代に入ると、我が国は高度経済成長に向けて前進し始めたが、それとともに老人の座は不安定なものになってきた。そんな中で、国を挙げて経済発展に専念するためには、老人問題が社会問題になるのをできるだけ防ぎ、これを子供の責任として家族の手中にできるだけとどめておくことが必要であった。そして、たとえ老人問題が家族問題から社会問題になっても、これを解決するための下地を醸成しておくことが必要であった。こうして、崩れかけていた敬老思想の堅持が必要になってきたのである。（森1989：35、傍点筆者）⁵⁾

つまり、経済成長期の只中にあった1950年代後半から1960年代当時で

は、老人問題よりも経済問題が優先され、経済発展を鈍らせる要素を排除しようとしていた風潮が窺えよう。さらに、森(1989:38)は、老人福祉法の成立(1963年)を踏まえた上で、「政府が社会に理念とか規範とかを表明したいと思うときには憲法や憲章という形をとるのが普通である。それにもかかわらず、『老い観』を法律の規定のなかに置いたのは、年を追って『敬老』が『軽老』に変貌しつつあることに対して、行政・立法両当局者が強い危機感を持ち、老人扶養の社会化(＝社会保障)にブレーキをかけ、これをできるだけ子供の私的責任にとどめておきたいと願っていったからであった」などと(森1989:38、鍵括弧・丸括弧ママ、傍点筆者)、老人福祉法制化を巡る内情を推察している。換言すれば、新たな老人福祉法制化の実現による公的・社会的責任の増幅が、旧来の家庭的・私的責任をより一層縮小させてしまうこと、すなわち、人々の「軽老」につながるものが政策上の重要命題であった経済発展を阻害することを危惧した関係者による苦肉の策として、法の条文に老人の生き方(＝老い観)を明文化せざるを得なかったという内幕を認識できる。こうした公的・社会的責任の一端を、法の内容や文言を操作することで、家庭的・私的責任へと転嫁させようとしていたところに一種の政策的意図を汲み取ることができる。

一方、中川善之助は国民の祝日批判として、「老人は『多年にわたり社会につくしてきた』のだから尊敬しようなどと法律はいつているが、とんでもない誤解である。老人はただ個人として敬愛されるのであり、社会につくしてきたから、その返報として敬愛するというような、取引勘定ではない。そんなことをいえば、社会につくさなかった老人はどうなるのか」などと言及するが(森1984:22)⁶⁾、老人を祝う理由として、ただ個人としてなのか、社会的功労者としてなのかという違いはあるにせよ、その論点のみに終始してはいけな。こうした祝日というお祝いムードを高め、老人に対する人々の意識・関心を掻き立てながら、より家庭的・私的責任を強固なものにしようと目論む政策的な意図や思惑を把握し直すことこ

「敬老」関連の概念整理及び「養老」から「老人福祉」への転換の伏線（中畠）（157）110
そが重要であろう。こうした風潮は、「（各）県においてこれに先立ち、9
月15日を“としよりの日”と定め、この日を中心に、老いはなぐさめ、
若きは励ます、同胞相愛の美風を興す運動を展開することにある」（森
1984：18）⁷⁾をはじめ、地方に目を向けると、例えば、「敬老のまち推進都
市宣言」をした秋田県鹿角市、「親孝行都市宣言」をした神奈川県厚木市、
「皆年金都市宣言」をした熊本県水俣市、「生涯学習都市宣言」をした山梨
県韭崎市などの各自治体の動向にも窺うことができる（同：196）。すなわ
ち、これらから、国や各自治体の取り組みのねらいや意図、さらにはそれ
らが潜在化させているものを読み解いていくことが求められよう。

4 敬老儀礼と養老事蹟が潜在化させていたもの

ここまでの検討をまとめたものが図1（「日本における孝（孝道）・敬老・
養老・養生・優老から老人福祉への展開図[試案]」）である。ここでは、「孝
（孝道）」が基となり、次孝として「敬老」が重視され、その大衆的な倫理
化・実践化として「養老」が芽生え、敬老、養老、養生、優老などの混在
状態を経て、いかに「老人福祉」へと理念転換が図られようとしていたの
かを試案する手がかりを示した。「徳教・礼教の影響を強くうけていた我
が国にあっては、孝道の方が強く、一般的な社会救済の面は強く現われな
かった。…（中略）…我が国では家族中心の孝道が発達し、社会に対する
はっきりとした養老事業は余り発達を見なかった」などからも（中央社
会福祉協議会 19--：4-5= 小笠原 1992：4-5）⁸⁾、「孝（孝道）」の影響を大き
さが窺い知れ⁹⁾、忠孝博愛という形で促されたその倫理化・実践化では、
「養老ということを習俗的見地からみれば優老俗である」とか（橘 1971：
249）、「養老とは、単に老人に衣食を給することばかりではなく、礼を以
て老者に仕えるという意味も含まれている」などと、ただ単に養うのでは
なく、いかに礼を尽くし、大切に養うかが日本では重視されていた（中央
社会福祉協議会 19--：1= 小笠原 1992：1）。なお、表2で示した孝（孝道）、

敬老などの危機意識のなかで、いかにそれらが政治・政策と結びつくことになるのかの探究は、次章の表4の分析を通して行いたい。

他方、戦前から続くわが国の養老事業では、「之からの養老院はもっともっと明るいものでなければならない。それには先づ第一に、入っている老人や一般社会の人達が養老院というものに対する考え方を変える必要がある。今まで養老院と言えは年をとって働けない人が行く所、社会の敗残者が行く所であり、この世から忘れられ見棄てられた人が死ぬ迄いなければならない所だと考えられていた」などと（中央社会福祉協議会 19--：21= 小笠原 1992：21）¹⁰⁾、養老院が自他ともに悲観的かつ暗澹たる場所と認識されており、危機からの脱却や理念転換においては、人々の意識変化や老人・養老院への印象を改変しなければならないことが求められていた。

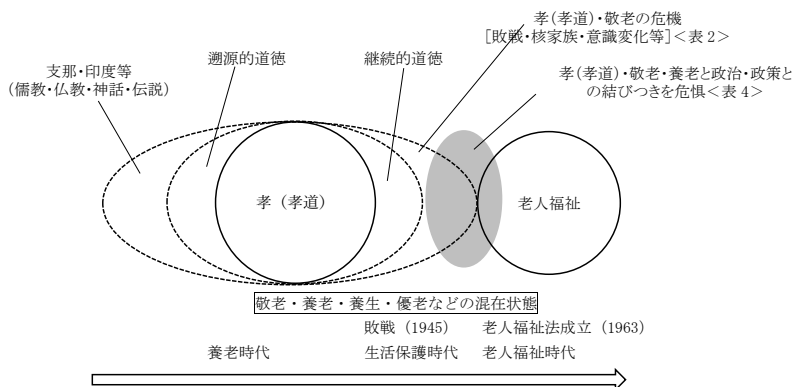


図1 日本における孝（孝道）・敬老・養老・養生・優老から老人福祉への展開図〔試案〕

【注】江戸時代以降、儒教の影響が強く、孝が道義の根本であり、敬老がこれに次ぐ徳義として考えられ、老を尊び、長を敬うの道は王道の基であると森（1984:25）は述べる。一方、伊沢（2017:288-289）は儒教は「尚古主義」ゆえ、その社会は超保守化すると言及する。

【出典】筆者作成による。

Ⅲ 事例検討——「養老」から「老人福祉」への転換の伏線

1 名古屋養老院を事例として

上記の一連の理念的検討を踏まえつつ、抽象的・概念的な整理に留まらず、実践的側面から捉え直すこともさらなる理解の深化に寄与するだろう。そこで、実際の養老院の事例を取り上げ、誰が誰を対象にどのような実践に取り組んでいたのかを具体的に注視してみよう。ここでは、空也養老院を前身とし、のちに名古屋養老院と改称されたケースに着目し、そこでの実践活動から「養老から老人福祉へ」の理念転換につながる糸口を見出すことを試みる。

「養生道、養老道さらに老年医学などは閑人の余枝にもならなかった」とされた終戦当時（橘 1971：23-4）、東京養老院院長の川瀬（1958：110-1）は、「養老事業の骨髓というものは、実は、院長が如何に収容老人等を指導教育するかという点に在る」などと、自らの実体験を踏まえながら主張しているが、名古屋養老院の場合はいったいどのような運営状況だったのだろうか。古い資料に目を遣ると、大野隆阿弥という人物と戦災の影響が窺い知れる。社会福祉調査研究会編（1994：98-9）を紐解くと、以下のように記される。少し長いが引用してみよう。

空也養老院 名古屋市裏門前町

事業主 大野隆阿弥 高野久兵衛

主義 仏教

目的 空也上人ノ高德ヲ景慕シ世ノ鰥寡ニシテ自活シ能ハサル者ヲ収容シテ之ニ衣食ヲ給与シ以テ天寿ヲ全フセシムルニ在リ尚余力アルトキハ市内ノ赤貧者ニ米又ハ金ヲ施与ス

創立 明治三十五年一月

空也講ナルモノアリ時々相会シテ仏ヲ拜シ共にニ安心立命ノ地ヲ得ンコトヲ斯セリ、一昨三十三年七月鰥寡孤独告クルナキノ窮民ヲ救フコト如何トノ議起リ之ヲ他ノ同志ト謀リ遂ニ養老院ヲ設立スルニ至レリ是レ明治三十四年六月ニシテ始テ収容シタルハ本年一月ナリ

現在収容者十九人（男六人、女十三人）最高齡八十八歳、若年六十七歳空也講ニ属スルモノ上人ノ偉徳ヲ慕ヒ斯事業ヲ創メタルモノニシテ該院ニ入りテ保護ヲ受クヘキ者ハ名古屋市ニ籍ヲ置クモノニ限ルトノコトナリ院内ハ男子部女子部ト別ニシテ各棟ヲ異ニス比較的清潔ニシテ保護行届ケルカ如シ維持費ノ如キモ他ヨリ仰カスシテ講中ヨリ支出スルトナリ漸次發達ノ見込ナリ（社会福祉調査研究会編 1994：98-9、下線筆者）¹¹⁾

なかでも、上記下線部に着目すると、内務省社会局（1990）『社会事業功労者伝』（日本図書センター、368-370 頁）内に、大野が詳解されているのが目を惹く。ここでも長いが引用する。

大野隆阿弥氏

大野隆阿弥氏は、嘉永三年三月二十一日、愛知縣丹羽郡佐野村に生れた。明治七年から同十五年まで丹羽郡赤見村栽松寺住職杉山義範について、佛学及び漢学を修めた。其後、京都蛸薬師極楽院空也堂住職上人萬原定慶師について得度、入門した。以後、熱心に佛道を励んだが、當時圓頂社會の情勢が、唯米櫃の中に於ける生活に安逸して、何等社會的に働きかけないのを嘆じ、常に悶々の情を禁じ得なかった。昭和二年七月、院の組織を財団法人とし、事業を徹底せしむるべく、萬般の設備を完了するため、全力を傾注したのであった。其効果は順次に挙り、創立以来昭和三年までに、収容して天寿を全ふせしめた

者、實に四百二十六人の多きに達した。又、昭和二年には、慶福會から、終身奨励金を下付せらるることとなった。猶、同年の陸軍大演習の際には、社會事業功勞者として、天皇陛下に拝謁仰付けられたのである。昭和三年十一月、畏くも即位の大禮を行はせらるるに方り、社會事業に関する功績を認められ、内務大臣より表彰状を下付、銀牌を授與せられた。（内務省社会局 1990：368-70）

上記から、施設運営において、大野の奮闘は大きいものがあったことが認識でき、仏学や漢学を修め、終身奨励金や大臣表彰などを受けていた大野を中心とした経営はやがて、醸造業を営み、大野とともに共同発起人に名を連ねた浅野儀助の息子、浅野三郎に引き継がれていくことになった。浅野新体制では以下のように、復興、移転、合併などと平坦ではなかった実態が垣間見れる。詳細を窺うべく、ここでも引用してみよう。

社会福祉法人 名古屋養老院（養老）

名古屋市千種区仲田本通 院長 浅野三郎

明治三十四年十一月、市内中区西境町の空也宗養老寺に大野隆阿弥、浅野儀助の兩人発起人となり空也養老院を創設シ保護事業を開始した。四十三年三月にこの町の名を養老町と名付けられる程、既にその存在は広く認められていた。又大正八年七月当時の院長大野氏は名古屋離宮に於いて大正天皇の養老事業に対する御下問に奉答の光榮に浴して面目を建てたことも本院の歴史を飾っている。その後昭和二年七月、財団法人名古屋養老院と改称し、大真会という仏教団体が経営して托鉢をしながら維持していたが、次第に困難を来して救護法による保護施設となるまでに多くの辛酸を舐めた。この難関を突破した院長浅野氏は、昭和十一年十一月新宿御苑の観菊会に夫妻招待の光榮に浴した。

昭和十六年には又社会事業団体として特別御下賜金を拝受し、これを記念して百二十名の収容設備をもつ院舎の拡張を図った。二十年三月の戦災では全焼の厄に遭い市営の東山寮に移って収容者には大禍なきを得たが復興については都市計画の爲め、旧敷地が学校建設地となり先ず土地の問題から悩んだ。取敢えず西区桜木町に仮建築として復興したが、二十六年九月本院理事伊藤繁一氏が現在地に五六〇坪を無償貸与されたので院舎の一部完成を見た。その後十二月拡張工事が完成したので前記桜木町を移転合併することが出来た。本院収容者の医療面については愛知県済生会病院長千田嘉八氏を迎え、嘱託医として熱心なる協力を得、入院者については市営瑞穂寮を利用している。二十七年五月福祉法人の認可を受けた。

つまり、1929（昭和4）年の救護法成立までの苦難を耐え忍んだ浅野の頑張りが施設を存続していたと捉えられる。彼のこうした功勞の背後には、「（浅野は）百二十年の歴史をもつ銘酒“シャチの光”と草薙の醸造の家業を継ぎ傍ら院長となった人であるが『氣狂水を作っているからその罪滅ぼしに養老院のお世話をしている。酒造の方は父儀助氏から受継いで十五年になるが、早く後継者をみつけて譲り渡しこの養老事業に専念したい』と語る。現在収容者の五十三名。なお収容物故者の遺骨は、昭和四年十一月覚王山墓地内に納骨塔を建設して埋骨している」などという事情があったことが注目される（中部社会事業短期大学編 2003：588、丸括弧内筆者）。

さらに、1950年代に入り、同院の実情は医師として往診していた勝沼（1955：109-10）によっても詳しく報じられ、「そこには常時五十人くらいの無縁の老人が収容されていた。大学病院の近くでもあったので、参観にしてみると、いかにも設備は不完全、衛生状態は悪く、手当も甚だよくなかった。そこで私は特志でもってそのお世話を引きうけ、週に一回、病

人を診ることにした。設備なども寄付をすることにして、状況はいくらか改善された。後には教室の共鳴者にも代るがわるいってもらって、そのようなお礼は、直接私から出したのでは受けとらぬにきまっているから、いったん財団に寄付して、そこから出してもらうようにした。二十年間継続したが、戦災で焼けてしまった。最近復興したようであるが、私としては今後も心にかかけたいと思っている」などと（勝沼 1955：109-10）¹²⁾、戦災の影響が認められる。この勝沼の記述のなかで、とりわけ印象深い事例として、一老婆を収容したケースである以下のものが注目される。

名古屋養老院の事例

そのうち一人のお婆さんが入院することになった。ところがこのお婆さんは、ときたま往診する私をまるで神様のようにいい、身動きできぬような体でありながら、私がゆくと合掌して感謝の心をあらわした。この態度は次第に周囲に感化を及ぼして、往診の私たちは患者一同から非常に大切にされ、やがて養老院全体に、医師に対する感謝の念が自然と盛り上がってくるようになった。私の長い医師生活の間で、こんなに持続的で、しかも根深い感謝の念によって報いられたことは未だかつてない。私はこれによって逆に尊いあるものを授けられた。私が二十年の間これをつづけたのは、自分自身の力によるといわんよりは、むしろこの人たちの、素朴ではあるが真摯きわまりない人間的誠実さに導かれた結果であると言っても過言ではない。（勝沼 1955：111）

つまり、医師という立場から内情を捉えた勝沼の言説からも、終戦直後の惨状は否めなかったが、患者による感謝の念という素朴で尊い感情が人々を動かしていたと捉えられる。もっとも、空也上人の高徳に根ざした創始者、大野の養老事業への想いは、同院内に留まらず、後継者たちによって他の県にも影響することとなり、「岐阜養老院」（現在の岐阜老人

ホーム)の「沿革」のなかで「本院ハ明治四十一年(中略)大正七年ニ至リ名古屋市中区養老町養老寺住職大野隆阿弥師ト図リテ財団法人仏教養老同志倶楽部ヲ設立シ(以下略)」などという記述からも窺い知れる(井村 2008:36)。ところで、養老院運営のために資金は不可欠であるが、この資金調達はどうようになっていたのだろうか。この点を調べたのが表3であり、典拠は、『昭和六年八月刷成 財団法人名古屋養老院要覧』であるが(井村 2008:31)、ここから、同院は地元、名古屋市の継続的な援護により成り立っており、1914(大正3)年からは愛知県が、1916(大正5)年からは内務省が、1921(大正10)年からは宮内省が補助しており、徐々に財政基盤を固めていたことが分かる。なお、この表のなかでもっとも金額(合計額)が多かったのは1925(大正14)年の5,870円であり、当時の金額を2023(令和5)年現在の貨幣価値に換算すると約2,348万円であり、施設運営費としてはそれ程高額とは言えなかった。また、同院では、民間財源による補助が思いの外少ないことから、民間人たちの理解の低さも認識できる。

表3 『財団法人 名古屋養老院要覧』に見る公的補助[1908～1934年] (円)

	宮内省	内務省	愛知県	名古屋市	サルタレ ル財団	慶福会	天台宗 本山	坂文種 報徳会
1908(明治41)				100				
42				100				
43				200				
44				200				
45				200				
1913(大正2)				200				
3			100	200				
4			100	200				
5		150	100	200				
6		80	100	200	80			

7		70	100	200				
8		50	100	200				
9		50	100	250				
10	100	50	150	250				
11	300	200	200	250				
12	400	300	200	250				
13	400	200	200	250				
14	200	200	200	250		5,000	20	
15	300	200	200	250			20	400
1927（昭和2）	300	200	300	250			25	
3	300	200	500	250			30	
4	300	200	500	250			30	200
5	400	100	550	250			30	200
6	400	100	550	210			50	200
7	400	100	825	150			30	150
8	300	500	450	150			10	75
1934（昭和9）	300	500	510	150				

【注】網掛け部分は、本表でもっとも公的補助額が高額であったことを示している。
 【出典】『昭和六年八月刷成 財団法人 名古屋養老院要覧』、『昭和十一年八月刷成 財団法人 名古屋養老院要覧』及び井村（2008：33）を参照。

2 日本の「孝道論」及び「孝」と政治・政策との結びつき

上記から、戦前から終戦直後までの養老院経営の困難さと、時代背景に翻弄された特殊事情、さらには厳しい財政状況下での経営と、周囲の理解の実際などを捉えてきた。このような背景の下、老人を取り巻く社会福祉行政施策は、戦後、徐々に動きを見せ始め、新生活保護法成立（1950年）以降、養老院は養老施設（生活保護施設）となり、老人福祉法成立（1963年）により老人福祉施設へと衣替えしていく。だが、この過程で、廣池（1929:45）、中央社会福祉協議会（19--:5）、橘（1941:114）、中川（1952:6）、森（1984:18;1992:38）らに象徴されるように、「孝（孝道）・敬老・養老と政治・政策との結びつき」が危惧され始めることになったという（表

4 参照)。いったいこれはどういうことなのか。

既述の通り、わが国では、孝は「人間の最初の徳行」であり、(沢柳 1910 : 26-7)¹³⁾、それは継続的道德あるいは遡源的道德と言い換えられると沢柳 (1910 : 31-36)¹⁴⁾ が表現したように、過去・現在・未来を通じて励行されるものとされた。また、岡 (1937 : 18) によれば、「孝に三種ありとなし、大孝は親を尊ぶこと、次孝は親の名を辱めないこと、次々孝はよく養ふことである」などと一応の整理がなされた¹⁵⁾。だが、「孝道は今や危機に瀕している」(有田 1925 : 49)、「孝の道易からず」などと(石井 1938 : 717)¹⁶⁾、その維持・継続が危ぶまれ始め、そうしたなか、これらと政治・政策との結合という問題点が浮上することになった。殊にこの点が強調されたのは戦前・戦中においてであり、皇孝発揚会編 (1940 : 30-1) が、「皇道の世界化は、日本建國の精神であり、日本國体の使命であり、天ツ日嗣の天皇道である。天皇を欽仰し翼賛するは、我等臣民の祖先伝来の道であり、この遺風を顕彰し恢弘するは日本臣民の道であり、皇國の孝道であった。これにより、自己も救はれ、家も栄え、力も出て、智慧も湧く。社會も、國家も、興隆し、世界人類も齋ひまつらるるなり。これは理論でもなく、宗教でもなく、日本の体験の示す道であった」などと論じたように、新秩序建設新体制樹立と皇孝發揚運動を強力に推し進めることで戦時体制の維持・強化に貢献させようとした。つまり、「孝道は實に道德の全体に関するものにして、特に我が國家社會の組織とは極めて密接の關係あるものなり」と言及する沢柳(1910: 序)や、「孝道は家の親、國の親、教への親に敬愛を画し、更に延いては自己の長上に敬愛を画す事を含んで居ったのであります」などとする廣池 (1929 : 45) から分かるように、孝(孝道)が道德的な概念であるため、時代背景や社会情勢の影響を受けやすく、翻ると、容易に政治的・政策的に利用されやすいことに注意を払わなければならない、単に親子間や家庭内だけに留まらず、国家や社会の動向や方向性をも左右することになることにも留意が必要であろう。

なぜなら、「日本の孝道論はよく子供を訓練したといえるが、同時にまた甚だしく親を墮落させたといわなければならない。ただ親だからといって、自からは何の自省も自戒もないのに、子に対しては貪欲に孝養をむさぼり求めるような親を、世間は余りにも寛大に容認しすぎたのではなからうか。…（中略）…若者は若者らしくあることを人は先ず心掛けねばなるまい。親である事、老齢である事、そのものが絶対的に貴いのではない。孝養敬老の思想を、ただ昔のように、神の如く絶対的なものとして祭り上げることは、彼らに人心を遊離させ、時には反発をさえ呼び起すに過ぎないであろう」などと言明されるように（中川 1952：6）、この論法は、年少者より年長者に、一般庶民より行政官僚により強く効力を発揮し易いからである。森（1992：38）は、「我が国の場合、明治期以降の近代化の歩みの中で、この親孝行が政治体制と強固に結びついていたことに一つの問題がある。これは、先進国における老人問題と我が国の老人問題とが全く違う点であり、我が国に於ける老人問題の解決を遅らせている要因の一つでもある。しかし、この分野における研究はまだ全くといってもいいくらい未開拓である」などと¹⁷⁾、この論点のさらなる掘り下げの必要性を主張し¹⁸⁾、近年、利谷・大藤・清水編（1990：212-3）は、「脆弱な後発資本主義たる日本資本主義の発展にとって、扶養共同体としての『家』は、安い豊富な労働力を供給し、また不況など資本の都合によりそれが不要になった時には吸収して、貧弱な公的扶養制度の肩代わりをするなど、その果たすべき役割は大きかった。そのイデオロギー的再編・強化として強調されたのは新たな『孝』の原理であり、それが扶養権利義務の順位に現れた」などと述べるが、それらが実証的に検証されることはなかった。それ故、本稿では、「養老・老人福祉施設数・入所者数の推移と『孝道・敬老・養老』に関する主な法制化」（表5）を作成し、老人を取り巻く法制化と養老・老人福祉に関する実践がいかなる関連性を有していたのかを分析した。

その結果、1926（昭和元）年～1982（昭和57）年までの期間は、時期

区分として、(1) 養老時代 [1926 ～ 1949 年]、(2) 生活保護時代 [1950 ～ 1962 年]、(3) 老人福祉時代 [1963 ～ 1982 年] の 3 つに区分できる。(1) 期では、養老賑恤の御沙汰書 (1915 年) 以降の救貧法成立 (1929 年) などの政策的動きが見られ、1 施設当たりの平均入所者数 $((B) \div (A))$ は、34.9 ～ 43.6 人という数値が得られた。次いで、新生活保護法成立 (1950 年) や社会福祉事業法成立 (1951 年) などにより、養老院は養老施設と改称され、生活保護施設となった (2) 期の 1 施設当たりの平均入所者数は 52.9 ～ 64.6 人というデータが得られたが、1960 (昭和 35) 年に減少傾向が見られたところに留意しなければならない。ここでは、国民皆保険・皆年金制度の実施に伴う施設入所者数の減少の影響が考えられよう。さらに、1963 (昭和 38) 年の老人福祉法成立以降の老人福祉時代 ((3) 期) では、68.5 ～ 73.5 人となっていたが、1980 (昭和 55) 年及び 1982 (昭和 57) 年に減少するなど、安定的に増加しているわけではなかったことも注目される。ここでは、臨時行政調査会 (第二次臨調、会長 土光敏夫) による「小さな政府」を目ざした増税なき行政改革や、「日本型福祉社会」(1982 年、臨調基本方針) づくりの強調の影響などが窺い知れた。

因みに、1963 (昭和 38) 年以降の老人福祉費 (百万円) を見ると、4,774 円 (1963 年)、6,890 円 (1965 年)、18,154 円 (1970 年)、224,361 円 (1975 年)、476,119 円 (1980 年) と増加しており、これを施設数で単純に割ってみると、その数値は、6.91 (1963 年)、9.01 (1965 年)、17.1 (1970 年)、126.9 (1975 年)、211.0 (1980 年) などとなり、1970 年代後半以降の老人福祉費の急増が目立っている。

表 4 「孝 (孝道) ・敬老・養老と政治・政策との結びつき」を説明する主な言説

主な言説	出典
孝道は家の親、國の親、教への親に敬愛を画し、更に延いては自己の長上に敬愛を画す事	廣池 (1929 : 45)

孝道については古来から数千万言を費されて居り、我が國民の誇とする所であるが、さて之が實行されて居ない	東京雄弁協会（1930：322-323）
長を敬い老人に礼を尽すことを教えて来た事実が良かれ悪かれ、我が国養老事業の発展を遅らせてきたことは否めない	中央社会福祉協議会（19--：5）
皇室に対する崇敬親愛の情が敬神崇祖の念に結びつくことによって一面宏遠なる肇國の精神を通じて尊嚴なる國体の本義に通ふ	橘（1941：114）
日本の孝道論はよく子供を訓練したといえるが、同時にまた甚しく親を墮落させた。ただ親だからといって自から何の自省も自戒もないのに、子に対しては貪欲に孝養をむさぼり求めるような親を世間は余りにも寛容しすぎた	中川（1952：6）
“としよりの日”を定め、この日を中心に老いはなぐさめ、若きを励ます。同胞相愛の美風を興す運動を展開しようとした	森（1984：18）
我が国の場合、明治以降の近代化の歩みの中で、この親孝行が政治体制と強固に結びついたことが一つの問題である	森（1992：38）
「家」制度の再編・強化は日本資本主義発展のために必要であり、そのイデオロギーとして「孝」の原理が使われた	利谷・大藤・清水編（1990：212-213）

【注】網掛け部分は、孝（孝道）・敬老・養老と政治・政策との結びつきを強く批判的に論じた記述を表す。

【出典】筆者作成による。

表5 養老・老人福祉施設数・入所者数の推移と「孝道・敬老・養老」に関する主な法制化

年	養老・老人福祉施設数 (A)	入所者数 (B) (人)	1施設当たりの平均入所者数 (B) / (A) (人)	区分	老人福祉費 (百万円)	孝道・敬老・養老・老人福祉に関する主な法制化
1926	48	1,674	34.9	養老	——	養老賑恤の御沙汰書（1915）
1928	60	2,259	37.6	養老	——	救貧法案発表（内務省、1928）
1929	61	2,525	41.4	養老	——	救貧法公布（1929）

1930	66	2,753	41.7	養老	——	全日本方面委員連盟結成 (1931)
1935	90	3,920	43.6	養老	——	厚生省設置・社会事業法 (1938)
1951	250	13,226	52.9	生活保護	——	新生活保護法施行 (1950) 社会福祉事業法公布 (1951) 「としよりの日」制定 (1951)
1955	471	26,793	56.9	生活保護	——	
1958	545	35,227	64.6	生活保護	——	国民健康保険法公布 (1958) 国民年金法制定 (1959)
1960	607	39,082	64.4	生活保護	——	全国老人クラブ連合会結成 (1962)
1963	690	47,273	68.5	老人福祉	4,774	老人福祉法公布 (1963)
1965	765	54,788	71.6	老人福祉	6,890	老人福祉課設置 (社会局内、1964)
1970	1,064	76,697	72.1	老人福祉	18,154	高齢人口比率 7.1% (1970)
1973	1,384	100,163	72.3	老人福祉		「福祉元年」と位置づけ (1973) 老人対策室設置 (総理府、1973)
1975	1,768	129,886	73.5	老人福祉	224,361	
1980	2,257	161,792	71.7	老人福祉	476,119	
1982	2,593	182,959	70.6	老人福祉		老人保健法公布 (1982)

【出典】厚生省社会局老人福祉課 (1962: 1)、三浦・忍 (1983: 50-55)、行政管理庁行政監察局編 (1984: 166-167) をもとに、筆者作成。

IV まとめ——考察と今後の課題

以上、本稿では、「養老から老人福祉へ」の理念転換の背景を探る研究の一環として、まず、これまで未整備であった「敬老」関連の概念整理をし直した上で、孝 (孝道)・敬老・養老と政治・政策との関係性について実証的に分析することを試みた。具体的な研究課題は5点あり、最後にこの5点についての解答を考察することでまとめていきたい。①日本における「孝 (孝道)」、「敬老」、「養老」、「養生 (訓)」、「優老」について概念整理をし、こうした類似概念が日本人にいかに関容されていたのかについては、日本では、皇室への情と家族思想が結びつきつつも、仏教の慈悲濟度と儒教の修身徳治により、孝 (孝道) を基とし、忠孝博愛という形で「敬

老」思想が発展し、その大衆的な倫理化・実践化として、「養老」が生成され、老人福祉の時代に至るまで類似概念が混在していたことが明かされたこと（図1参照）、②「敬老」意識の弱体化や敬遠主義に対し、人々がどのような危機意識を抱き、いかなる現状打開策を採ろうとしていたのかについては、経済成長期の只中にあった1950年代後半から1960年代当時では、老人問題よりも経済問題が優先され、その一方、人々の「軽老」が政策上の重要命題であった経済発展を阻害することを危惧した関係者による苦肉の策として、老人福祉法の条文に老人の生き方（＝老い観）を明文化したように、公的・社会的責任の一端を、法の内容や文言を操作することで、家庭的・私的責任へと転嫁させようとしていたことが示唆されたこと、③敬老儀礼と養老事蹟について、「明るい養老事業」の志向が何を潜在化させていたのかについては、そもそも「孝（孝道）が道義の根本であり、敬老がこれに次ぐ徳義として考えられ、老を尊び、長を敬うの道は王道の基である」などと論じられ（森1984：25）、それは、継続的道德・遡源的道德などと、過去・現在・未来を通じた一貫した道德理念であると捉えられ、さらに、養老では、「礼を以て老者に仕える」ことも含意していたため、これらが悲観的かつ暗澹たる場所とされた養老院・養老施設の実態を直視することを阻み、惨状や窮乏を覆い隠していたこと、④「養老から老人福祉へ」の理念転換の伏線を養老院の実践例を取り上げながら、実証的に考究することについては、大野隆阿弥、浅野三郎らの活躍が1929（昭和4）年の救護法成立までの苦難を耐え忍ぶ要因となった一方で、公的補助金額を見ると、戦前では1925（大正14）年の5,870円が最高額であり、この金額を現在の貨幣価値に換算すると約2,348万円であり、施設運営費としてはそれ程高額とは言えず、また、民間財源も僅少ななか、生活保護費、老人福祉費という公的資金の付与を得るまでに今暫く時間を要したこと、⑤旧来、問題視されてきた孝（孝道）、敬老、養老と政治・政策との結合では、廣池（1929：45）、東京雄弁協会（1930：322-323）、中

中央社会福祉協議会 (19--:5)、橘 (1941:114)、中川 (1952:6)、森 (1984:18;1992:38) などの主張が見られたが、その実証的裏付けとして 1926 (昭和元) 年～1982 (昭和 57) 年までを、(1) 養老時代 [1926～1949 年]、(2) 生活保護時代 [1950～1962 年]、(3) 老人福祉時代 [1963～1982 年] の 3 つに時期区分した上で、「養老・老人福祉施設数・入所者数の推移と『孝道・敬老・養老』に関する主な法制化」(表 5) を分析したところ、(2) 期の 1 施設当たりの平均入所者数では 52.9～64.6 人というデータが得られた反面、1960 (昭和 35) 年に減少傾向が見られ、国民皆保険・皆年金制度の影響が考えられたこと、(3) 期では 68.5～73.5 人となっていたが、1980 (昭和 55) 年及び 1982 (昭和 57) 年に減少するなど、安定的に増加しているわけではなく、臨時行政調査会による「小さな政府」を目ざした増税なき行政改革や、「日本型福祉社会」(1982 年、臨調基本方針) づくりの強調の影響が窺い知れたことが示された。

本稿では、「日本における孝(孝道)・敬老・養老・養生・優老から老人福祉への展開図[試案]」(図 1) を得たことや、「孝(孝道)・敬老・養老と政治・政策との結びつき」を実証的に分析できたことが主な成果と言えるが、まだまだ粗雑であり、引き続き、さらに精緻な分析が求められる。また、図 1 にも表示したが、「支那(中国)・印度・韓国・台湾」などの東アジア諸国から伝わった儒教・仏教・神話・伝説などの影響も幅広く考察しなければならない。これらについては別稿で論じることとしたい。

注

- 1) 国内外の敬老に関する行事・組織としては、満州社会事業としての「社団法人大連敬老会」(『満州社会事業年報 昭和 6 年度』1931 年、61 頁)、本願寺派社会事業としての「歌織敬老会」「尚齒会」「敬老會」などがあった(『本願寺派社会事業便覧 昭和 11 年 4 月』1936 年、210-211 頁)。
- 2) 森 (1984:25) は、「我が国の養老事業はその起源を皇室に求めることができる。『日本書紀』仁徳天皇 67 年 (1039 年) に『困窮きを振い、死を弔い、疾

を問いて、孤孀を養いたもう』とあるのを史実に現れた嘴矢とする」と述べ、大久保（1936：530）は、「我国に於ける窮民賑恤の経過は、既に記述した如く上代に於て早くも、天皇及び皇室により行はれて居るから、其歴史は非常に古い」としている。一方、橘（1971：265-6）は、「明治維新後、同元年明治天皇の東京遷都に際して、賑恤褒賞の典をおこなわせられ、殊に養老の勸慮を忝うした」などと言及している。

- 3) 忠孝一本の教材研究として、斉田（1945：365-7）は、「(一) 精神上の慰安
1 差異、2 服従、3 安心、4 娯楽、5 同情、(二) 身体の保護 1 衣服、
2 食物、3 居室、4 設備、5 運動、6 睡眠、7 入浴、8 疾病」などを挙げる。
- 4) 社会教育協会（1938：28）は、敬老の美風として、支那の美点に着目し、「一般に敬老の心は極めて篤い」などと述べる。
- 5) 穂積陳重は、我が国の敬老を「東隠隠家、西隠隠国」などと称し、これに対し森（1989:34）は、「最近言われている日本型福祉論も、老人に限って言えば『東隠隠家』と同意である。この点、我が国は先進国のなかでは『隠家』指向をとる唯一の国である」などと考察している。
- 6) 高橋（1966：4）は、『『敬老』ということばでは、むしろとしよりをとしより扱いにしようということにならないであろうか』などと危惧する。他方、森（1983：38-9）は、『実は、『敬老の日』の審議の過程で幾つかのことが話題になったと聞いている。例えば、若いときから悪事の限りを尽くし、刑務所生活の方が長かったというような老人に対しても『敬老の日』に、『敬愛し』、その『長寿を祝う』のかというようなことである。しかし、この規定は、個々の老人に対して、具体的な権利を与えるものではないということで、法解釈上、さして、問題にもならなかったらしい』などと吐露している。
- 7) 「1966（昭和41）年に9月15日が『敬老の日』という国民の祝日に制定され、毎年行われる福祉月間の行事も大きな喜びをもって繰り広げられた。（大阪）市社協では、この運動を昭和四〇年から『老人敬愛運動』と名を改め、市、大阪市老人クラブ連合会（以下大老連）と共同主唱して『としよりの健康を高める』『老人の人生経験を社会に寄与する』『老人福祉に対する社会の理解を深める』ことを目標に種々の行事や事業を行っている」という（大阪市社会福祉協議会編1992：138、鍵・丸括弧内ママ）。他方、諸外国でも老人福祉を強調するための月間があり、例えば、アメリカ（5月）、フランス（12月）、ドイツでは1953年11月8日（日曜日）を老人の日として、カソリック労働者協会が主唱しており、その大司教の Dr.Lorenz Jager は「この日を若い人達が老人を尊

敬し敬愛する日として記憶してほしい」などと言ったとされる（池川 1960：141）。

- 8) 「老人を大切にするという思想を養成されて来た我が国にあっては、老人を大切にすることは、日常茶飯事の当然しなければならない事であると、意識的にも無意識的にも思い込んでおり、かつ、それを実践して来たのであるから、特に養老事業と銘打って行う必要がなく、…（中略）…かくて上古より近世に及ぶ我が国の養老事業は、後に言う皇室によって行われた養老事業を除いては特にこれと言った発展をしなかった」とされる（中央社会福祉協議会 19--：5＝小笠原 1992：5）。
- 9) 「我が国古代から風習その他から考えると、家庭での親孝行が養老事業に優先して行われるべきものとなっていた」や（中央社会福祉協議会 19--：3-4＝小笠原 1992：3-4）、「徳川時代となると、儒教の影響が強く、孝が道義の根本であり、敬老がこれにつぐ徳義として考えられ、老を尊び、長を敬うの道は王道の基であるとされて、幕府をはじめ、各地の諸大名、特に金沢藩、会津藩、米沢藩、宇和島藩では高齢者厚遇の処置がとられ、また、孝子の表彰、賀寿、尚齒会、養老の典等が行われた。明治時代に入ると、封建制度は破壊され、社会情勢は一変したが、家族制度と隣保相扶の慣習はすたれなかったから、急速には養老施策の必要は生じなかった」などにもそのことが端的に窺える（森 1984：25）。
- 10) 「明るい養老事業を！」をアピールした芦澤（1951：36）は、「有料老人ホームの設立は目下痛切の要求となっている。高い生活費をつかったら老人の経済生活も忽ち行きづまってしまう。家族制度の崩壊の結果、子供たちと別れて生活する方が互に便利だというような場合も出てくると思う。老人が安心して生活できるように有料老人ホームの建設こそ新時代の要求である」などと主張している。
- 11) 『『名古屋養老院』は、空也念仏宗の僧侶である大野隆阿弥が主唱者となり、当人も含め 29 名の発起人によって 1901（明治 34）年 6 月に設立された。当初は、大野隆阿弥の住所である名古屋市中区裏門前町を仮事務所とした。その後、隣家一棟を借り収容所として、『空也養老院』と命名し、14 名の入所者から事業は開始された』などと論及される（井村 2008：31）。
- 12) 中部社会事業短期大学編（2003：72）は、「名古屋養老院（養老）名古屋市中区養老町 院長 大野隆阿弥 明治三十四年六月設立され現に社会福祉法人として現存しているので別項（六）に詳述するが、大正六年末収容者は二六名で資産は七、〇二三円、収入一、五三五円、支出一、四五三円、職員は院長外七名

であった」などと記している。

- 13) 「孝道即佛道」として四十二章経が挙げられる（沢柳 1910：137-8）。
- 14) 「孝道（伊藤仁斎）孝は愛を以て本と為す。愛なれば順なり。順なれば百行成る」や（沢柳 1910：218-9）、「忠孝一本説（藤田東湖）」などが重視される（沢柳 1910：85）。
- 15) 「孝行という言葉を英和辞典で引くと、普通 filial duty と出ている。今度はこの filial という英語を英英辞典で引くと、語源はラテン語で、of son or daughter（息子又は娘の）という意味であると説明されている。つまり、子供の（親に対する）義務というほどの意味である。だから子供の親に対する責任というのは決して日本人に固有の倫理ではないことが分かる」などと森（1992：37）は解説する。また、竹内（1937：293）は「或る日本人が宿泊した西洋の家での話に」を例に採り、「西洋での敬老主義は、概ね愍老主義を出ないものであって『孝』の徳を基礎とする我々の敬老主義とは大いに距離がある」などと指摘する。
- 16) 孝道の内容として、「1 従順、2 親愛、3 尊敬、4 奉養（養休・養志）、5 成徳、6 喪祭、7 崇祖」の7つが指摘される（古川 1954：7）。
- 17) 「戸主権（父権）を強めることによって、天皇制強化の基礎は確立されていった。すなわち、『家』の制度が確固としていれば国家は安泰であり、また、親に対する『孝』は天皇に対する『忠』に通ずるものであった」などと森（1992：40、丸・鍵括弧内ママ）は、そこに支配の二重構造の存在を汲み取っている。
- 18) 「忠孝一致」は日本人が生み出したレトリックであると指摘した伊沢（2017：386-7）では、とりわけ以下の説明が注目され、この視点からの研究の余地が窺える。「神道という日本古来の宗教を、外来宗教である仏教と完全に分離させ、しかも、天皇を神道の一番トップに祭り上げることによって、国家の体制を固めるということをしました。それともう一つ、儒教を使って、天皇に対する忠義を国民に持たせるということをしたのです。ただし、それを可能にするためには、中国そのままの儒教ではダメでした。中国の儒教は何よりも『孝』を優先します。そのため、もし日露戦争でロシア軍と戦っている戦艦の艦長のもとに父親が危篤だという知らせが来たら、その艦長は帰らなければなりません。それではマズイので、明治の人は『忠孝一致』と言ったのです。忠孝一致とは、天皇陛下に対する『忠』と親に対する『孝』は一致することです。『おまえたちは天皇陛下の赤子だ。天皇陛下は親も同然である。だから、子として孝のように忠を尽くせ』ということですよ」。

文 献

- 有田音松 (1925)『有田音松説話集 増補第2版』有田音松出版部。
- 芦澤威夫 (1951)「明るい養老事業の建設を」『厚生』6 (9), 36。
- 中部社会事業短期大学編 (2003)『社会福祉人名資料事典 第2巻』日本図書センター。
- 中央社会福祉協議会 (19--)『明るい養老事業』 (= 1992 小笠原祐次監修『老人問題研究基本文献集 第29巻』大空社)。
- 著者不詳 (1931)『満州社会事業年報 昭和6年度』。
- 著者不詳 (1936)『本願寺派社会事業便覧 昭和11年4月』。
- 遠藤隆吉 (1936)『孝経及東西洋の孝道』集園学舎。
- 古川確悟 (1954)『孝道の行くえ』古川学園。
- 行政管理庁行政監察局編 (1984)『老人福祉対策の現状と問題点——行政管理庁の行政監察結果からみて』大蔵省印刷局。
- 廣池千九郎 (1929)『孝道の科学的研究』道德科学研究所。
- 池川 清 (1960)『老人福祉』関書院。
- 井村圭壮 (2008)「名古屋養老院の運営 (財源) に関する考察」『東北社会福祉史研究』(26), 31-39。
- 石井 満 (1938)『日本の孝道』春秋社。
- 磯野本精 (1916)『日蓮上人の孝道』白鳴社。
- 伊沢元彦 (2017)『逆説の日本史1 古代黎明編』小学館。
- 賀川豊彦 (1928-1931)『家庭科学大系 第22回』家庭科学大系刊行会。
- 勝沼精蔵 (1955)『桂堂夜話——邂逅と郷愁』黎明書房。
- 川瀬専之助 (1958)『老人処遇』東京養老院。
- 孝道振興会 (1934)『孝経訂正』孝道振興会。
- 皇孝発揚会編 (1940)『皇孝道』体験ノ日本社。
- 厚生省社会局老人福祉課 (1962)『老人福祉関係資料』厚生省社会局老人福祉課。
- 三浦文夫・忍博次 (1983)『高齢化社会と社会福祉』有斐閣。
- 森 幹郎 (1983)『政策視点の老年学——対策の盲点』ミネルヴァ書房。
- 森 幹郎 (1984)『老人問題解説事典』中央法規出版。
- 森 幹郎 (1989)『老いとは何か——老い観の再発見』ミネルヴァ書房。
- 森 幹郎 (1992)『老人問題——理解の仕方』ミネルヴァ書房。
- 名古屋養老院 (1931)『昭和六年八月刷成 財団法人 名古屋養老院要覧』。
- 名古屋養老院 (1936)『昭和十一年八月刷成 財団法人 名古屋養老院要覧』。
- 中川善之助 (1952)「孝道と敬老について」『社会事業』35 (10), 4-5。
- 内務省社会局 (1990)『社会事業功労者伝』日本図書センター。

新村 拓（1992）『老いと看取りの社会史』法政大学出版局。

岡 成志（1937）『父と子の争』東光書房。

大久保素公（1936）『太子に聴け』最高理性社。

大阪市社会福祉協議会編（1992）『大阪市社会福祉協議会四十年史』ナニワ印刷。

大谷派慈善協会本部（1915）「養老賑恤の御沙汰書と愛知縣の敬老會」『救済』5（9），
34-35。

斉田コト（1934）『新家事教材並指導法の研究 高2』啓文社書店。

沢柳政太郎（1910a）『孝道 上巻』富山房。

沢柳政太郎（1910b）『孝道 下巻』富山房。

社会教育協会（1938）『教育パンフレット 第316輯——二人の観た支那の姿』。

社会福祉調査研究会編（1994）『戦前日本社会事業調査資料集成 第9集（社会事業
施設）』勁草書房。

橘 覚勝（1941）『老年期』弘文堂。

橘 覚勝（1942）「敬老の現代的意義」『厚生事業』26（10），21-34。

橘 覚勝（1943）『子供と生活環境』羽田書店。

高橋思敬（1966）『『敬老』の周辺』『月刊福祉』49（7），4-5。

竹内芳衛（1937）『長寿の科学』東陽閣。

竹内芳衛（1942）「敬老に就て」『社会事業研究』30（5），26-27。

利谷信義・大藤 修・清水浩昭編（1990）『老いの比較家族史』三省堂。

東京雄弁協会（1930）「孝道と青年敬老会」『これからの新しい演説』大阪堂。

塚本 哲（1967）『老人社会福祉』ミネルヴァ書房。

養老町編（1978）『養老町史 通史編 上巻』養老町。

養老町（2023）「養老町の歴史」（<https://www.town.yoro.gifu.jp/bunya/rekishi>
2023.9.1 取得）